

2020年6月22日

博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 佐藤 秀樹
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目（和文） 注意の範囲モデルに基づく反すうの持続過程
論文題目（英文） The sustaining process of rumination based on the attentional scope model

公開審査会

実施年月日・時間 2020年 6月 15日 10:30-12:00
実施場所 Zoomにて開催

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	鈴木 伸一	博士（人間科学）	早稲田大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・教授	嶋田 洋徳	博士（人間科学）	早稲田大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・准教授	田山 淳	博士（障害科学）	東北大学	臨床心理学

論文審査委員会は、佐藤秀樹氏による博士学位論文「注意の範囲モデルに基づく反すうの持続過程」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1 コメント：中間報告会にて指摘したいくつかの問題点をその後しっかりと解決し、本日の発表は、明快でわかりやすい論理展開であった。

1.2 質問：注意の狭まりとワーキングメモリとの関係性をどのように考えるか。ワーキングメモリの個人差が反すうに影響すると考えるか。

回答：本研究では、特性要因としてのワーキングメモリの個人差は想定しておらず、個人内における注意の狭まりの程度という観点から検討を行っている。

1.3 質問：注意の範囲に着目した介入方法と従来の認知バイアス修正法などとの関係はどのように考えるか。

回答：認知バイアス修正法は注意の偏りや方向性を修正するものと考えているが、本研究は認知バイアスを生じさせる注意資源の大小そのものに焦点を当てていると考えている。

- 1.4 質問：注意の範囲の狭まりが反すうを悪化させることはわかったが、逆に注意の範囲を広げることで反すうは改善すると考えるか。
回答：直接的な検討を行っていないので明確な回答はできないが、注意の範囲と反すうとの相関分析の結果からは、その可能性が示唆される。
- 1.5 質問：研究1において、RIOの構成概念妥当性の考察で、仮説が支持されなかった理由として文化差を挙げているが、どのようなことを意味しているのか。
回答：欧米圏と比較してアジア圏では感情表現が抑制的であることやポジティブ感情が高くないことが指摘されていることを意図している。
- 1.6 質問：研究2において、反すうの操作に6分群と1分群が設定されているが、その根拠は何か。
回答：先行研究では8分が採用されていたが、予備実験において6分程度でも8分とほぼ同等の反すう状態を形成できることがわかったので、被験者の負担を考慮して6分に設定した。
- 1.7 質問：研究3において、注意の範囲を操作する条件を80：20で設定しているが、その根拠は何か。
回答：同様の実験課題を用いた複数の先行研究で同じ割合が使用されていたことを根拠としている。
- 1.8 質問：本研究の知見を活かした介入方法としてはどのような方法が考えられるか。
回答：まずは、実験で用いた課題を活用して、20：80という注意を広げる操作を行って反すうを改善させる方法が考えられる。また、気そらしの心理教育として注意の範囲を意識した方法を推奨するなどが考えられる。
- 2 公開審査会で出された修正要求の概要
- 2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。
- 2.1.1 研究1において、RIOの構成概念妥当性に関する考察では、安易に文化差を理由とするのではなく、言語表現の等価性に加えて、日本における反すうの状態像が具体的にわかるような丁寧な考察に修正するべきである。
- 2.1.2 研究3において、注意の範囲を操作する条件を80：20で設定しているが、その根拠について、本研究で用いた実験課題に関する先行研究にとどまらず、認知心理学的な観点からその妥当性について考察するべきである。
- 2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。
- 2.2.1 RIOの構成概念妥当性に関する考察においては、単に文化差に帰属するのではなく、言語表現の等価性に加えて、日本人の反すう状態ならびに感情表現や感情抑制の特徴を考察することを通して、なぜ欧米と異なる結果が生じたのかを考察することとした。
- 2.2.2 注意の範囲を操作する条件を80：20で設定した根拠として、本研究に用いた修正版Attentional Breadth Taskに関する先行研究に加えて、認知心理学で広く用いられているドットプローブ課題やプローブ検出課題に関する先行研究についても80：20の割合で認知バイアスの修正手続きが行われているという知見を引用し

て、その根拠の妥当性を考察することとした。

3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文の研究目的は、精緻な文献展望から先行研究における問題点および課題を抽出した上で明確に設定されている。また研究の内容についても、これまでうつ病発症のリスク要因として指摘されてきた反すうのメカニズムに関する新たな知見を見出そうとする独創的なものであり、社会的意義および妥当性も高いといえる。
- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文では、研究目的を達成するために、状態反すうを測定するための尺度の開発を行った後、その尺度を反すうの客観指標として、反すうによる注意の範囲の差異を検討するとともに、ネガティブ気分下での注意の範囲が反すうに及ぼす影響について詳細な検討を行った。各研究の方法論およびデータ解析は、心理学および関連領域の先行研究の手法を踏襲した妥当な方法である。さらに研究対象者は、本論文が想定する母集団から適切に抽出されており、データの妥当性も高いといえる。したがって、本論文の方法論は明確かつ妥当であると判断できる。なお、本論文の内容を構成する研究は、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認（承認番号：2018-024、2018-199、2019-022）を取得し、参加者への十分なインフォームドコンセントを行った上で実施しており、倫理的な配慮が十分になされていると評価した。
- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本論文の成果は、これまでの先行研究において指摘されてきた反すうのメカニズムに関する知見をさらに発展させた妥当な内容であるとともに、それらを定量的、かつ実証的に検討した点において明確性も非常に高い。以上のことから、本論文の成果の明確性・妥当性は高いと判断できる。
- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。
 - 3.4.1 本論文は、これまで客観的な測定方法が未開発であった状態反すうを測定する尺度の開発を行い、状態反すうの精緻な評価を可能にした。
 - 3.4.2 本論文は、これまで反すうの認知情報処理メカニズムとしてあまり注目されてこなかった注意の範囲に着目し、注意の範囲が反すうの持続に強い影響を及ぼすことを解明した。
 - 3.4.3 これまで反すうは循環論的に悪化を繰り返す状態像として指摘されながらも、それらを実験的に検証するには至っていなかった。本論文は、反すうが注意の範囲を狭め、注意の範囲の狭まりが反すうを持続させることを実験的に証明した。
- 3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。

これまで、うつ病のリスク要因としての反すうに関する臨床心理学的研究では、反すうそのものをコントロールすることはかえってネガティブ思考をエスカレートさせてしまうことから、反すうそのものをターゲットにしたアプローチは望ましくないと考えられてきた。しかし本論文において、反すうの維持要因は、注意の範囲の狭まりであることが明らかになったことで、反

すうそのものへのアプローチ法の開発に資する知見が見出されたといえる。

また、これまで反すうは、個人の反応スタイルという特性要因として扱われることが多く、反すうが実際に生じている際の認知情報処理のメカニズムは未解明であった。本論文は、状態反すうという現象面に焦点を当て、その特徴を注意の範囲という観点から検討した。これは、うつ病の脆弱要因の検討という視点に加えて、症状コントロールの具体策の提案に資する知見である。この知見の学術的意義ならびに臨床的意義は大きいといえる。

3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。

3.6.1 複雑化する社会の中でストレスの増加は大きな社会問題になっており、なかでもうつ病は自殺やメンタル不調による休職者の増加の中核的な背景要因となっている。本研究は、うつ病の発症・維持・悪化のメカニズムの解明に資する知見を見出したものであり、人間の Well-being の追及を基本理念として掲げる人間科学学術院、ならびに人間科学の発展に寄与するものであると考えられる。

3.6.2 本研究は、反すうという思考の反復現象を学際的な手法を用いて検討した。研究手法は、関連領域である脳科学あるいは神経行動科学分野にも応用可能であり、人間科学の発展に寄与するものであると考えられる。

3.7 不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。

4 学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

佐藤秀樹, 国里愛彦, 小関俊祐, 鈴木伸一：2019 Rumination about an Interpersonal Offense Scale (RIO) 日本語版の作成と信頼性・妥当性の検討. 認知療法研究, 12 巻 2 号, 111-119 頁

佐藤秀樹, 伊藤理紗, 鈴木伸一：2017 考え込み方略の有無と刺激の感情価による検索誘導性忘却の差異の検討. 認知療法研究, 10 巻 1 号, 45-53 頁

佐藤秀樹, 竹林 唯, 入野 (巢山) 晴菜, 伊藤理紗, 鈴木伸一：2017 考え込みと刺激の感情価による検索誘導性忘却の差異の検討. 行動医学研究, 23 巻 1 号, 16-23 頁

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上